

武蔵野 ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ



国立国会図書館
デジタルコレクションより

国木田独歩の『武蔵野』から120年

詩情豊かな筆致で武蔵野の情景を描いた作家・国木田独歩の『武蔵野』が刊行されて2021年で120年を迎えました。武蔵野市に建つ2つの独歩ゆかりの碑の意義も考えながら、あらためて武蔵野市と独歩の『武蔵野』とのつながりを読み解きます。

武蔵野市在住では

なかった独歩に

武蔵野のイメージを

定着させた決定的な1冊

国木田独歩が明治31(1898)年、雑誌『國民之友』に発表し、明治34(1901)年に書籍として刊行された『武蔵野』は、詩的な文章でつづられた武蔵野の自然賛歌として今も多くの人々に愛されています。独歩は明治4(1871)年、今の千葉県銚子市に生まれ、その後、父の仕事の関係で広島県や山口県など中国地方を転々とし、武蔵野市に住んだことはありませんでした。「独歩といえは武蔵野」のイメージが定着したのは、ひとえに1冊の著作『武蔵野』の影響方に他なりません。

独歩は、山口県内で教師生活を経験

し、日清戦争では『国民新聞』の従軍記者として活躍。帰国後は渋谷村(現在の渋谷区)に住み、明治30(1897)年、詩人として『独歩吟』『山林に自由存す』を発表します。この頃、大家の娘だった榎本治子と恋仲になり、結婚。独歩が武蔵野を歩いた時、隣には治子がいたといわれていますが、『武蔵野』の作中では「或友」と記されています。

このことから分かるように、独歩の『武蔵野』は、小説と随筆、詩の間を行き来するような、事実と創作が入り混じった構成になっています。ヨーロッパで広まった浪漫主義と呼ばれる文学の潮流に影響を受け、作中でも引用されるロシアの作家ツルゲーネフやイギリスの詩人ワーズワースらによる美しい自然とそこに垣間見える人々の生活の描写から受けた影響が、『武蔵

野』のベースになっているといつてよいでしょう。

近代化する明治の日本で

都市と自然の両方を愛し

武蔵野に

「心のふるさと」を見る

「武蔵野に散歩する人は、道に迷うことを苦にしてはならない。どの路でも足の向くほうへゆけばかならずそこに見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武蔵野の美はただその縦横に通ずる数千条の路を当もなく歩くことによつて始めて獲られる。春、夏、秋、冬、朝、昼、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、ただこの路をぶらぶら歩いて思いつきしだいに右し左すれば随处に吾らを満足させるものがある。これが

じつにまた、武蔵野第一の特色だろうと自分はしみじみ感じている。武蔵野を除いて日本にこのような処がどこにあるか。」(『武蔵野』より)

独歩が『武蔵野』の作中で具体的に歩いたルートとして記しているのは、当時住んでいた渋谷から鉄道で境停車場(今の武蔵境駅)まで乗り、ここを起点として桜橋へと向かい、そこにあった茶屋で一休みして玉川上水沿いを上流へ歩くという道なのです。しかし、『武蔵野』で描かれるのは、風景描写だけにとどまりません。目と耳を研ぎ澄まし、武蔵野の自然の移ろいを全身で感じ取り、書き記そうとする独歩の筆致は、単に自然の光景だけでなく、そこに暮らす人々の日常の営みに対する慈しみの思いに満ちています。独歩は、自然と人々の生活が交わる光景こそが「自分の詩興を喚び起こす

(以下略)といい、「大都会の生活の名残と田舎の生活の余波がここで落ちあつて、緩やかに渦を巻いているようにも思われる。」と記しています。独歩が『武蔵野』を発表した明治後期は、日本が近代化へと向かう真つ只中。近代化、都市化する東京にあつて、進歩や発展の一方で決して忘れてはならない「心の中に広がるふるさと象徴」として武蔵野の心象風景を描こうとしたのかもしれませんが。

独歩は記者、詩人、作家としてだけでなく、編集者としても才能を發揮した人でした。『武蔵野』刊行の4年後の明治38(1905)年、「東洋唯一」をうたう日本初の女性誌として誕生し、



三鷹駅北口の詩碑には「山林に自由存す」と刻まれている

今もライフスタイル誌として続く「婦人画報」の初代編集長を務めています。『婦人画報』は、近代化へと突き進む日本において「理想的な女性像」を発信すべくつくられた画期的なビジュアル誌でした。独歩が、新しい女性像を提案する最先端の媒体の編集長の椅子に座りながらも、一方で『武蔵野』のような自然を礼賛する作品を手掛けているのも興味深いところです。

独歩ゆかりの碑が

「武蔵野らしいまちとは何か」を今も問い続ける

武蔵野市内に、独歩ゆかりの石碑が2つ建てられています。1つは三鷹駅北口の詩碑です。当初は、『武蔵野』にも記述がある武蔵境駅前に、との案もあったようですが、三鷹駅は武蔵野市役所へと連なる武蔵野市の玄関口であり、水路が地下化され見えなくなっているものの、かつて独歩が歩いた玉川上水が通っている場所。独歩の碑を建てるにはふさわしいのではと、「文学散歩」を提唱して各地の文学碑建立に尽力し、後に武蔵野市の教育委員も務めた文芸評論家・野田宇太郎が提唱し、市が賛同して昭和26(1951)

年に建てたものです。独歩の詩から引用した「山林に自由存す」の碑文は作家の武者小路実篤の書によるもので、独歩の肖像レリーフは独歩の次男で彫刻家の佐土哲二が手掛けました。

書家・書道研究家の廣瀬裕之は、この碑に「山林に自由存す」の一節が刻まれたことについて、「自由に憧れた独歩の世界を表しているのと同時に、この一節のなかに武蔵野市民の自由と平和への祈りが込められていると考えられる。」と著書『刻された書と石の記憶』の中で書いています。「軍需工場の建設によって屋敷林や多くの畑や草場が失われただけでなく、自由そのものが束縛された世の中になった。それらが建つ前の「山林(もとの武蔵野の風景)いわゆる武蔵野の原風景)のなかにこそ本当の自由が存在する」との意味も含まれているのではないかと推測する。(同書より)

もう1つの碑は、『武蔵野』にも登場する玉川上水に架かる桜橋のたもと、茶屋があつた辺りに建つ「桜橋畔文学碑」です。昭和32(1957)年、「武蔵野新聞」の社主・望月清次が発起人となり、前述の野田宇太郎が協力し、民俗学者の柳田國男らそうそうたる顔ぶれが世話人に名を連ね、独歩の没後

50年と武蔵野新聞発行7周年を記念して建てられました。碑には、『武蔵野』6章の桜橋が登場する一節が刻まれています。

実は、三鷹駅北口の碑は昭和62(1987)年から翌年にかけて、移転問題が浮上していました。「店舗が立ち並び、自転車の駐輪などで雑然とする駅前」に武蔵野の自然を愛した独歩の碑はふさわしくないとのことから、西久保1丁目の「野鳥の森公園」への移転の請願が市民から出されました。一方で現地存続を主張する陳情も提出され、武蔵野市議会でも審議が重ねられた結果、駅前の環境整備に力を入れたらいいとの意見を付して採決され、そのまま残されることになり、今に至ります。独歩の碑が武蔵野のシンボルとしての場所にあつたことが、まちな景観づくりにも影響を与えたと見ることもできるのではないのでしょうか」と武蔵野ふるさと歴史館・公文書専門員の高野弘之さんは語ります。

都市と自然の両方を愛し、進歩や発展だけでなく牧歌的な人々の生活の中に美を見いだした独歩。その碑が投げかけた「武蔵野らしいまちとは何か」という問いは、今も私たちに残された宿題なのかもしれません。